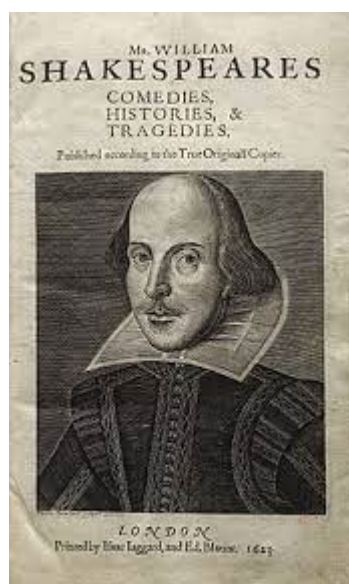


2021/10/6

(オマケの英語教室 To be, or not to be. That`s the question) 書庫版



高校生の時、自分が哲学ごっこをしていた折、親父から

「自分の時代に旧制一高の学生で藤村操と言う奴が「この世とは何か」という大難問に直面し、最後には「この世は、曰く不可解」という「巖頭の感」という遺書を残して華嚴の滝から投身自殺をした」

と言う話を聞きました。

親父は「曰く不可解」という前の長い漢文口調の全文を覚えていて何十年も経ったその時でさえ諳んじる（そらんじる）事が出来ましたが、自分は耳にした当時既に最後の部分しか記憶に残りませんでした。

そうして、その話を聞いたときに感じたのは

「そんなことで死ぬ人がいるんだ」

「なんか勿体ない」

でした。

そして少し時間が経った後に抱いた感想は

「遺書を全文漢文口調で書くなんて、ちょっと自分に酔いすぎているよな」

と言う意地の悪いものでした。

続いて同じく高校時代に喜劇も書いたシェークスピアの四大悲劇の一つハムレットを読みました。

その中で

「生きるべきか、死ぬべきか。それが問題だ」

という文章に接して「なんか変だな？」(とと思いました。前後の筋と合わない気がしたので  
す。復讐を果たそうという人間が抱く言葉ではない様な気がしたからです。

それから幾星霜、最近英語に接する機会が増えたこともあって、この

「生きるべきか、死ぬべきか。それが問題だ」

の原語が

To be, or not to be. That`s the question.

である事を知りました。

その原語を見ると上記の訳が完全な誤訳である気がしたのです。

生きるとか、死ぬとか何処にも描いてないじゃないか。問題だとも書かれていない。

単に

「(今の状態が) 然るべき状態なのか、そうではないのか。それが(自分の抱えている) 疑問だ」

と書いてあるだけではないか。

もっと端折って云えば

「これでいいのか、よくないのか。よく分からない」

或いは

「自分のしている事はまともなのか、まともじゃないのか。悩んでしまう」

是なら復讐劇の中での前後との辻褄が合う気がしました。

それにしても何だって又こんな大袈裟な訳に仕立て上げちまったんだろう？

昨今、外国人と多く接してみると

「そうそう簡単に自殺なんかする奴はいない。大抵は相手を張り倒してでも生きるタイプが多い。「生きるべきか、死ぬべきか」なんて云うはずがない」

このハムレットの和訳にせよ、冒頭の藤村操の「巖頭の感」にせよ、

「我々日本人って、死にたがっているのかな？」

と言う気がしてしまいました。

と言うかやたらと直ぐ死を持ち出したがる。

表面おとなしく見える分、中身は結構「大袈裟な思考をする民族」なのかもしれないなあと  
ふと思ってしまいました。